

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19320071

研究課題名（和文） 節構造における分断と結束性の調査・研究

研究課題名（英文） A Research on Coherence and Interference in Clause Structures

研究代表者

中島 信夫 (Nakashima Nobuo)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：20155708

研究成果の概要（和文）：文中の語の間の関係は、通例、構造的に結束性があるが、その結束性が他の語句によって一時的に「分断」されることがある。本研究は、[1] 統語論、[2] 意味論・語用論、[3] 音声学、[4] 心理言語学の 4 つのモジュールにおいて、「分断」から「結束性」が復元される仕組みを調査した。その結果、どのモジュールにおいても分断は一種の「引用」のように扱われ、結束的構造が部分的に「保留」され、その後「再構築」を経て、解釈される傾向があることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：A sentence in general is made of structurally coherent relationships between its constituents; however, in many cases, some other constituents interfere with such a coherent relationship. We have investigated how a coherence is recovered from an interference, from four theoretical perspectives: [1] syntax, [2] semantico-pragmatics, [3] phonetics and [4] psycholinguistics. Our investigation revealed that interfering phrases in a coherent relationship function like quotations and that interpretation of such a structure involves processes of pausing the on-going structural analysis and reconstructing it when the interference is resolved.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
総計	7,600,000	2,280,000	9,880,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語、言語学、音声学、文理解、語用論

1. 研究開始当初の背景

(1) [統語論の立場から] (有村)

Luizi Rizzi (1996) の論文以降、統語地図学

(cartography) の観点から CP 構造の左端に生じる要素の配列と意味関係について注目されるようになっている。その点から英語の

非制限関係節 (non-restrictive relative clause) を再検討できないか考えた。

(2) [意味論・語用論の立場から] (中島)  
節の分断現象は、主として Noh (2000) などが関連性理論の立場からメタ表示の問題、あるいは、echoic use の問題として分析されていた。しかし、このような純粋に語用論的分析では、Lycan (2000) が指摘するように Performadox と呼ばれる意味論的問題は完全には解決できなかった。

(3) [音声学・音韻論の立場から] (福島)  
挿入句の音響特性について、Bolinger (1989) は「主節に比べてピッチが低く、その前後に休止を伴い、上昇調を持つ」と説明している。ピッチが低くなるのは挿入句全体にわたるのか否か、休止は無音でなければならないのか否か、また調子に関しても常に上昇調になるのか否かをはっきりさせる必要がある。これと同時に、これら3つの手段は必須要素なのか、それとも選択的なのかを明確にしたい。

(4) [文理解の立場から] (中谷)  
節が別の節により「分断」される構造を人間の処理機構がどのように処理するかという問題は、分野の黎明期から活発に取り上げられてきた (Yngve (1960), Chomsky & Miller (1963), Kimball (1973) に始まる中央埋め込み文の研究や、Frazier (1978) から始まる局所的曖昧性の処理の研究など)。近年の日英対照研究では、それまで気付かれなかった問題が浮き彫りになっていた。

## 2. 研究の目的

(1) [統語論の立場から] (有村)  
第一に、CP の統語地図をどう捉えるべきか Rizzi (1996) 等の論文を読んで、それと英語の非制限的關係節の分析とどのように関わるか考える。第二に、非制限的關係節と統語的にペアをなす制限關係節と同類とみなされることが多かったように思われるが、両者の共通点と相違点を明らかにし、新たな統語分析方法を考える。

(2) [意味論・語用論の立場から] (中島)  
従来の意味論と語用論とを峻別する分析法ではなく、Barwise and Perry (1983) によって提唱された状況意味論 (situation semantics) の枠組みで、節の分断現象に関する様々な問題を一挙に解決することを目指す。

(3) [音声学・音韻論の立場から] (福島)  
挿入句が主節には属していないこと (独立した音調句であること) を示す音響信号に、主要なものとは2次的なものがあるのかどうか

を探る。特に、声質を変化させることが、挿入句の独立性を保障する可能性があることを確かめたい。

(4) [文理解の立場から] (中谷)  
項・述語の分断の、処理に与える影響が日英語でどのように違うのかを、また、どのような条件にて違いが観られるようになるのかを行動実験により検証しつつ、「分断と結束性」の処理機序の解明に貢献したい。

## 3. 研究の方法

(1) [統語論の立場から] (有村)  
非制限的關係節研究の先駆者として McCawley (1998), Emonds (1979) をあげ、その分析の意義と問題点を検討し、インターネットを通じて様々な (これまであまり問題にされなかった) 現象を「発話内力」(illocutionary force) の観点から検討した。

(2) [意味論・語用論の立場から] (中島)  
節の分断現象に関する英語の事例を収集し分析を行った。一方、「遂行文」についての Austin と Lewis の相反する考え方の再検討、「判断」や「認識様相」といった認識論的概念を考察し分析の基礎固めを行った。

(3) [音声学・音韻論の立場から] (福島)  
様々な文献から集めた挿入句を含む文を読み上げ資料とし、イギリス英語話者 (ロンドン周辺居住者) の朗読をサンプルとした。サンプルの分析に使用したソフトウェアは Macquiner (R & D Scicon 社) や WASP (ロンドン大学提供) である。休止の存在、ピッチの変化や調子に加えて、挿入句末端の声質を分析対象とした。

(4) [文理解の立場から] (中谷)  
コンピュータを使った非蓄積型ムービング・ウィンドウ自己制御読文実験の遂行とそのデータ分析を基本とする。これは実験協力者にコンピュータのモニタ上において隠されている文を、ボタンを押すことによってセグメントごと (典型的には単語ごと) に読み進めてもらうもので、ボタンを押すタイミングを記録し、実験協力者がどのセグメントにどれくらいの時間をかけたかを調査するものである。コントロール文とターゲット文の読み時間の差を比較することにより、どのような要因が文のどの箇所での読みの遅延を引き起こしたかを知ることができる。

## 4. 研究成果

(1) [統語論の立場から] (有村)  
英語における非制限關係節の様々な統語現

象を見ると、その構造自体が厳密な意味での関係節化形成規則によって生じているのではなく、話題化規則によって生じたものと考えた方が自然な説明が可能となると論じた。この観察は、*She may have her parents with her, in which case where am I going to sleep?* (彼女は母親と同居するだろうが、その時私はどこで寝ればいいのか) という種類の例に基づく。つまり、一般的な制限関係節などにおいては、その節は[+Declarative]でなければならないのに対して、非制限関係節においては選択が極めて自由であるということを示していると言える。またこのような選択上の制限が見られないという事実は、非制限関係節が「主節」として扱われているということも意味する。そして、このことは、話題化が特殊な環境を除くと主節で生じるのが最も無標であるという事実とも一致する。しかし、一方で、非制限関係節が従属節であることもまた疑いのない事実である。この一見してパラドックスとも言える事態は、非制限関係節を独立文として主節とパラレルに派生し、スペルアウト以降において両者が合体するという句構造形成に関する問題とも関連していると論じた。

#### (2) [意味論・語用論の立場から] (中島)

分断の生じた副詞節と主節との関係は、直接話法における伝達節と非伝達節との関係と同種のものとして分析することによって意味論的・語用論的問題がすべて解決すると結論に達した。そしてこの結論に基づき、状況意味論の枠組みで分断の生じた構文を分析するとどうなるかを示した。その際、通常直接話法とは異なり、非伝達部に相当する主節は、例示として発話されていると同時に、真正の発話行為としても発話されている、いわゆる *Recanati* のいう *hybrid use* の一例であるとして処理した。分断の生じた構文の主節を直接話法における非伝達節と同種のものとして捉えることは主節を一種の「引用節」と見なすことを意味するが、今後の研究課題として、引用節の意味論的・語用論的分析を進めていけば、分断現象がさらに明らかになると予想される。

#### (3) [音声学・音韻論の立場から] (福島)

結論的に言うと、挿入句が独立した音調句であることを示す音響信号は、挿入句の種類によって使い分けられている可能性があることを否定できない。例えば休止の存在は、挿入句がむしろ短い場合に多用され、逆に長い挿入句の場合、休止の存在は頻度が落ちる。音調の種類についても、上昇調以外に下降上昇調も使われる。興味深いことは、挿入句が主節と同格の場合は音調の一致が見られるが、伝達節が挿入された場合に音調の一致は

むしろ稀であることであった。挿入句の文法構造も、使われる信号を左右するらしく、挿入句が伝達節の場合、無音休止の存在は認めがたいが、挿入句の末端部分でさし声が生じる例が見られ、この声は「終結を示す声」と看做しうる。さし声が生じるのは、発話速度とピッチの減衰により引き起こされたとも考えうるから、無音ではない「疑似休止」が用いられている可能性が高いと思われる。今後の課題として、挿入句を示す音響信号の選択が、話者の恣意的な選択に委ねられていないかどうかを吟味する必要がある。

#### (4) [文理解の立場から] (中谷)

中央埋め込み文に関して、日本語においては補語節の中央埋め込みによる処理分断の効果が動詞において見られなかったが、否定対極表現と否定辞の線形順序における距離の大小(局所性)がリアルタイム文理解に与える影響を調査したところ、読み時間に対する局所性の効果を示唆するデータを得た。これにより、項と述語の $\theta$ 関係に分断効果が観察されない日本語においても、他の文法依存関係には分断効果が見られることが確かめられた。今後はどのようなタイプの依存関係がどのような条件で文処理における分断効果を生むのか、検討課題となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

① Arimura, Kaneaki, 'Non-Restrictive Relative Clauses and Force' 『甲南大学紀要』160, 2010, 113-121 査読無

② Arimura, Kaneaki, 'Review of Fortuny's (2008) *The Emergence of Order in Syntax*' *Studies in English Literature* 51, 2010, 156-162 査読有

③ Nakashima, Nobuo, 'Inference and Epistemic Conditionals,' 『甲南大学紀要』160, 2010, 113-130 査読無

④ Fukushima, Akitoshi, 'Syllable Rhythm in VCCV-Type Disyllabic Words,' 『甲南大学紀要』160, 2010, 131-135 査読無

⑤ Nakatani, Kentaro and Gibson, Edward, 'An On-Line Study of Japanese Nesting Complexity,' *Cognitive Science* 34, 2010, 94-112 査読有

⑥ Arimura, Kaneaki, 'On the Pleonastic Nature of the Perfect Gerund in English,' 『甲南大学紀要』文学編 英語学英米文学特集 155. 2009, 33-60 査読無

⑦ Nakashima, Nobuo, 'A Semantico-Pragmatic Analysis of Performative Utterances, Part II: How Performative Utterances Make Statements,'

『甲南大学紀要』文学編 英語学英米文学特集 155, 2009, 15-31 査読無

⑧ Fukushima, Akitoshi, 'Pre-Fortis Clipping and Syllable Quantity of VCV-Type Disyllabic Words,' 『甲南大学紀要』文学編 英語学英米文学特集 155, 2009, 61-69 査読無

⑨ 中谷健太郎 「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」, レキシコン・フォーラム 4, 2008, 63-89 査読無

⑩ 有村兼彬 「名詞句表現における目的語解釈」, JELS (日本英語学会), 2008, 11-20 査読有

⑪ Nakashima, Nobuo, 'A Semantico-Pragmatic Analysis of Performative Utterances, Part 1,' 『甲南大学紀要』文学編 英語学英米文学特集 150, 2008, 1-19 査読無

⑫ Fukushima, Akitoshi, 'Emphatic Reading and the Insertion of Pause,' 『甲南大学紀要』文学編 英語学英米文学特集 150, 2008, 21-34 査読無

⑬ Nakatani, Kentaro and Gibson, Edward 'Distinguishing Theories of Syntactic Expectation Cost in Sentence Comprehension: Evidence from Japanese,' *Linguistics* 46-1, 2008, 63-87 査読有

⑭ 中谷健太郎 「文処理ストラテジーという視点から見た結果構文の類型論」, 小野尚之 (編) 『結果構文研究の新視点』ひつじ書房, 2008, 289-317 査読有

⑮ Nakatani, Kentaro, 'Opposition Structure is not Event Structure: A Study of Cancellable Transition in Japanese V-teiru.,' *Proceedings of the Fourth International Workshop on Generative Approaches to the Lexicon*, 10 May 2007, CD-ROM 査読有

⑯ 中谷健太郎 'Aspectual Presupposition, Entailment, and Composition in the Semantics of V-teiru.,' 言語処理学会第13回年次大会 (NLP2007) 発表論文集, 2007, 847-850 査読無

[学会発表] (計9件)

① 有村兼彬 On Unexpected Phenomena in Embedded Sentence, 甲南英文学会 第25回大会, 2009年6月27日, 神戸、甲南大学

② 中島信夫 The Hybrid Use of Utterances, 甲南英文学会 第25回大会, 2009年6月27日, 神戸、甲南大学

③ 福島彰利 挿入句の音響特性と結束性, 甲南英文学会 第25回大会, 2009年6月27日, 神戸、甲南大学

④ 中谷健太郎 日本語否定対極表現のオンライン処理にみる分断の効果, 甲南英文学会 第25回大会, 2009年6月27日, 神戸、甲南大学

⑤ 有村兼彬 「動名詞の時間解釈を巡って」, 日本英文学会関西支部第3回大会, 2008年12

月20日, 西宮、関西学院大学

⑥ Nakatani, Kentaro 'Is the Nesting Effect Caused by Structural Complexity or Structural Frequency? A Case Study of Japanese NPI Processing,' The 22nd Annual CUNY Conference on Human Sentence Processing, 2009, March 27, 2009, University of California, Davis

⑦ Fukushima, Akitoshi, 'Verse and Prose Rhythm in English,' The Workshop at University College London, 2008年3月28日, London, University College London

⑧ 有村兼彬 「名詞句表現における目的語解釈」, 日本英語学会第25回大会, 2007年11月10日, 名古屋、名古屋大学

⑨ Nakatani, Kentaro 'Opposition Structure is not Event Structure: A Study of Cancellable Transition in Japanese V-teiru.,' The Fourth International Workshop on Generative Approaches to the Lexicon, 2007年5月10日, パリ, École Normale Supérieure

[図書] (計1件)

① 有村兼彬 他4名, 英宝社, 英語学へのファーストステップ (改訂版), 2009, 255

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中島 信夫 (Nakashima Nobuo)

甲南大学 文学部英語英米文学科・教授

研究者番号: 20155708

### (2) 研究分担者

有村 兼彬 (Arimura Kaneaki)

甲南大学 文学部英語英米文学科・教授

研究者番号: 70068146

研究分担者

福島 彰利 (Fukushima Akitoshi)

甲南大学 文学部英語英米文学科・教授

研究者番号: 20199201

研究分担者

中谷 健太郎 (Nakatani Kentaro)

甲南大学 文学部英語英米文学科・教授

研究者番号: 80388751

### (3) 連携研究者 無し

( )

研究者番号: